

II 高校生の解放と自律

2、自律の方策

これからの高校は、現行の各教科を全面改編し、圧縮省力化したものとして「基礎概論」講座を設置し、これのみを高校の必修教科とし、現行のような全範囲を細かく網羅している段階は、「詳論」として大学受験勉強に直結する専門選択科目として別途改編し、そして競ってよい教科書をつくり、無料の授業をネット上で競わせ、必修とはいえ、出席強制もなく、期間も高1の3ヶ月から半年程度とし、残りの2年半を各自自由に使えることとし、そのうえで、各高校が特色や校風を強く押し出し、「受験」「スポーツ」「芸術」「芸能」「語学」「職業研修」「地方研修（社会研修）」「留学」等を掲げ実践していくようにするのが時代の要請ではないでしょうか
各々中学生は、「自己最上点（自己MAX）」を目指して、自分の目標に合った、特色・校風・選択授業・社会研修等を備えた高校を選ぶのです
これが、若いときを無駄にせず有能な人材として成長していき、三貢献（世界・国家・地域）できる人間となれる合理的な手段・有効な方策のひとつだと考えます

150年も同じような体制や方策でやるのではなく、日々年々変えていくべきでしょう

解放して、自由に自律的に成長させてあげましょうよ

さあ、日本列島民の幸福と列島の安全・繁栄のために、明治維新150年後の現在と未来の高校のあり方を真剣に考えましょうよ

① 教科改革

現行のカリキュラムや教科書では、無駄に細かくて、結局授業は途中で終わったりしています（例えば、日本史では、縄文土器や弥生土器についてバカみたいに細かくやり、結局、江戸時代の途中で終わり、肝心な近現代をやらなかったりしている）
また、何故その科目を勉強するのか、社会に出たときにどのように役立つのか、どのように役立たせるべきなのか等の話は一切出てきません

そこで、現行科目全てに（英数現古漢物化生地日世地政倫）、50分授業なら週2回の3ヶ月（高1の1学期）、約24回の授業で、教科を学ぶ目的や意味、社会に出たときの活用・応用や効用・有用性等を冒頭に説き、その教科の概説概論・全体俯瞰、そして本質実体を講義する「基礎概論」講座を設置し、英検か高1センター試験のような検定試験を国単位か県（州）単位で7月と9月や12月（補追試）に

でも実施すればよいのではないのでしょうか

そこで、高校卒業認定基準ですが、例えば、英数現古漢を必修とし、理科3社会4を選択して、12科目受験し、80点以上3科目・70点以上3科目・60点以上3科目・50点以上3科目で合格とし、高校前期課程終了認定とするなんていうのはどうでしょうか（まあ、受験さえすれば、点数は不問で終了認定し、ただ大学入試や研修受け入れの判定資料となる場合があるっていうのでもかまわないですが、ここでは、これ以上細かい議論には深入りしません）

ここまでの、全高校生の必修で、高校卒業認定をしてよいのではないのでしょうか（ここから先は、個々人の付加価値の付与獲得となります）

本当は、この過程を半年前倒しして、中3の後期にやり、検定試験は受験自由で、進学高志望者だけが12月にでも検定試験を受け、進学高への合否判定資料としてもよいのではないかと考えますが、まずは高校改革が先決ですね

結局、現行では、全員に受験レベルに近い内容をほぼ全科目にわたって強制するというカリキュラム自体に無理があるでしょう（実際にはやってはいないのでしょうが）

すなわち、戦前の旧制中学という帝大・陸士・海兵をも視野にいれた地域の数パーセントのエリートへの教育課程を新制高校に移行しながら、高校進学率約95パーセントということに無理矛盾があり、戦後はほぼ全員がエリート教育を受けるようにしてしまったのですから、ほとんどが落ちこぼれるのはあたりまえでしょう。したがって、現代の高校では、「基礎概論」のような教養・概要程度の科目の履修で十分でしょう（この「基礎概論」講座を半年とか1年とかかけてじっくりやるのも各高校の自由であり特色となるのではないのでしょうか）

後述いたしますように、高校1学期の「基礎概論」履修後の2学期以降の各高校の特色ある「多様な選択授業」や「演習ゼミ」や「職業現場研修」や「社会研修」の履修によって、高校後期終了認定とするのですが、これは付加価値であり、実体は個々人が優良人材となるための個々的な研修・修練的なものであって、形式的にも就活時の職務経歴のようなアピールポイントとなるもので、もちろん必修となるものでもありませんし、強制されるものでもありません

話を元に戻しまして、この「基礎概論」は、各高校で授業を設置するかしないかは自由であり、もちろん出席義務もなく、学校のサポートのもとで、各生徒が、教科書や参考書なりネット上の無料授業なりで、各自好きな方法で勉強すればよいので

す（塾・予備校がやるであろう授業や方策を学校が実施すれば、面倒見のいい評価の高い学校として発展するのでしょうか）（私立では、当然、中1か中2で実施するんでしょうね）

そして、現行の教科の大部分は、「詳論」講座として、選択科目となりますが、開講義務も出席強制もなく、すべて学校や生徒の自由とすべきでしょう

要は、「詳論」講座は大学入試への具体的な習得の指導課程となるわけですし、この点も後述いたしますが、この「詳論」講座の後に実施すべき「発展演習」講座「過去問演習ゼミ」等が高校の「本物の授業やゼミ」と言うべきものでしょう（第一志望必勝合格対策となる「過去問演習ゼミ」等が腕の見せどころでしょうね）

ところで、蛇足ですが、中学の勉強って、数学以外、ほとんど高校では、使わない・役に立たない（無駄な遠回しじゃないのか）のは何なんでしょうか

無駄中の無駄ですよ

やはり、高1の内容を簡単にしたものをやるべきではないでしょうか

② 教科書改革

「基礎概論」講座の創設にあたり、各教科にその教科書をつくらなければなりません

高校課程履修者として、やがて大学生になったり、社会人になったりするにあたり、文系理系問わず、最低限知っておかなければならないことを中心に、各教科の学習理由や学習目的を掲げ、将来、社会でどのように役立ち繋がっていくのかを提示し、全体像を俯瞰し、教科の本質実体を提示した概説教科書をつくらなければなりません

もちろん、社会人としての最低の教養の側面もあり、日本人として絶対に知っておきたい知識や理論も必掲ですが、大学受験に向けての基盤づくりと科目選択の契機となることも重要です

人材育成とか教育改革とか高校改革とか教科改革に関心のある方々が、競って優良な教科書を執筆する状況になれば最高です

教科書の取捨選択は、本来、生徒の自由中の自由であり、多種多様な教科書が競われれば生徒の選択の幅が広がり最高レベルの学習環境となるでしょう

教科の学習理由・目的・効用等に説得力があり、体系的俯瞰と実体提示に迫力がある教科書が多数執筆上梓される教育界になれば素晴らしいですね

（手前味噌で大変恐縮でございますが、本書『英語案内』は、もちろん徒での、その先陣の名乗りを上げさせていただいたつもりでございます）

そして、次に、「詳論」講座の授業・教科書は大学受験指導が本旨となるわけですから、「詳論」の教科書は大学受験のための教科書であり、この1冊で闘えるというようなものをつくらなければならないのです

様々な方々が、競って、本質を突いた受験直結の優良な教科書をつくってほしいものです

別に何冊も参考書を買わなければならないというのでは、教科書を買うとか、その存在自体に疑問が生じてしまいます

まともな教科書がそろえば、別に買うべきものは、資料集等と問題集だけのはずです

③ 「多様な選択講座」や地域の人たちとの交流

さて、高1の1学期だけが必修だとすると、あとの2年半はどうなるのか、以下に履修課程例をあげてみます

- ・ 大学受験に向けて「詳論」の選択科目を決め、ひたすら受験勉強に励む
- ・ 「詳論」科目を教養程度にいくつか受けてみる（日本人として社会人として、多少細かくて高度な知識や論理思考過程を身に付ける）
- ・ 様々な現役社会人や定年者による「職業概論講座」や「実習講座」（学校で実施する講座）を受ける
- ・ スポーツ・部活・芸術・芸能活動等に専念する
- ・ 職業現場研修に出る（学校外の現場に赴く）
- ・ 地方の独特な産業の職業現場研修や農林水産業や離島の社会研修に出る（地方での寮や住込みとなる）
- ・ 志望大学の教養課程の単位を取りに行く
- ・ 語学研修に出る（留学・ホームステイ、外国人観光客の多いリゾートや観光地や駐留米軍基地での研修や勤労等）

以上のようにいろいろあげられます

若年期で吸収力の抜群な高校時代の2年半を自由に使え、自律（自分の得意不得意や分を考え、社会貢献するためや社会人となるべき将来にとって有用な方向性を見極め、講座・演習ゼミ・研修先を決めていく）できる環境をつくれば、各個人はどんどん成長し、有能な人材が輩出される割合が格段とあがり、国力（日本列島力）が高まるでしょう

学校側としては、「詳論」講座だけではなく、各生徒のみなさんが優良な人材として成長できるような、様々な選択講座（「多様な選択講座」とここでは仮に言っておきます）を準備すべきなのです

まずは、教室での授業講座（次項で「演習ゼミ」に触れます）、次は、学校内実習室等での実習講座、そして、校外での実地研修等を用意するのです

すなわち、英数国理社の教科の授業だけを実施する時代を終わらせ、まだ将来の方向性に迷いがある生徒の方々には、様々な職業の人による輪講（「職業概論」講座）を用意したり、また、方向性が既に見えている生徒の方々のためには、本格的な実地講座を用意・紹介したり、例えば板前やシェフによる調理基本講座のような「実習講座」等（三重県の相可高校参照）、「多様な選択講座」を用意すべきなのです
人材育成という観点から一番あってほしいのは、「小論文・意見文・報告文講座」「社会人の素養講座」「プレゼン実践講座」等でしょうか（こういう類の無料講座がネット上にあふれ、多くの高校生が履修する時代を実現しなければならないのです・・・TED参照）

どういう選択講座を用意しているかが、その高校の特徴であり売りとなるのです
必然的に、近隣大学や地元企業との連携も重要となってくるでしょう
遠く離れた自治体・大学・高校・企業との提携も必要でしょう（いわゆる「姉妹〇〇」「協定△△」ですね）

また、学校を離れ、職業の現場や地方において、実地研修を受けることこそ、優秀な人材になるには、高校生にとっての最良の手段なのではないでしょうか

さらには、地元の小中学校等に、勉強・スポーツ・音楽・美術・パソコン等の指導に行くのも、人材育成や地域貢献の観点からも重要なことでしょう（指導する立場の経験やプレゼンの実践訓練となるはずです）

（そもそも、小中学校は、土日祭日も解放して、地元のシニア・定年者・社会人・大学生・高校生等の方々が暇を見つけて、地域一体となって生徒に勉強を教えるべきではないでしょうか）

もちろん、様々な福祉施設や保育所・幼稚園等の研修も言うに及びません

役所・町内会・消防団等の地元の組織との連携も大切でしょう（「高齢者対応応援講座（研修）」「消防防災訓練講座（研修）」「救急救命講座（研修）」等こそ必修講座なんでしょうね）

地域行政の現場研修や地場産業の研修などは特に推奨されるべきものでしょう

地域社会に問題意識を持った高校生であられる社会となるのです

このような地域との交流や地元の方々による「多様な選択講座」や、後述の「演習ゼミ」が開講されれば最高の高校時代を過ごせるのではないのでしょうか

そう、挙げれば、きりがないので

講座や研修終了後に、他の生徒に向けてプレゼンをすればさらな好効果が生じますね

さて、高1の夏休みから高3の終わりまでを、3ヶ月単位でみればおよそ10～11ターム、半年単位でみれば5タームですから、「職業概論講座」や「実習講座」なら、1タームに5講座受講しただけでも、2年半で、25から50もの職業と向き合えるし、現場研修や社会研修ならば、5～11ヶ所見て回れることになり、就職前もしくは大学入学前に様々な職業現場体験経験ができるわけです
もし、1ヶ所に専念したとすれば、就職や入学前に2年半の職人修行等ができることにもなります（これこそ、個々人の最良の選択という観点ですね）

さらに、例えば、警察・消防・海保・自衛隊等での訓練やIT企業等で研修を2年半も受けたら、スゴイ人材となれるのは必至ではないのでしょうか

（警察・消防・海保・自衛隊等では、学校のようにしてしまえばいいですよ・・・
高1の後半に研修を受け、3月に試験をし、4月から2年間、本格的な教育・訓練をしたらスゴイですね・・・こういう研修を受けつつ、大学に行き、キャリア官僚になるなんていうのは、現場経験のある官僚ってことで、スゴ過ぎますね）

もっとスゴイのは、在日米軍基地での研修でしょうか（英語を実践で身に付けられるうえ、安全保障を最前線で実感でき、国家国防の認識を深められるわけですね）

（さらに、ついでに言わせていただきますと、東大に「国家戦略学部」とか、外務・防衛・経産省等の研究肌の若手キャリア官僚や民間企業の国際通の方々が集まる「国際安全保障大学院」「国家戦略大学院」等が防衛省とか人事院に創設されれば、国際戦略に精通した人材が豊富になり、世界での立ち位置を思慮でき、国家の発展繁栄を企図できる逸材が多数輩出できるのではないのでしょうか）

何より急務なのは、13歳からでも入学できて授業料無料・手当付きで全寮制の「サイバー大学校」の創設でしょう（中学課程は付設すればよいでしょう）

東西の地方に2～3創って競わせればなお効果的ではないのでしょうか

高校後半の過ごし方に戻りまして、また、例えば、志望大学の教養科目の全単位をとってしまうなんていうのもありますよね

もちろん、スポーツや芸術で専門家を招いたり、そのもとに赴き、プロを目指して、2年半打ち込むのも推奨されるべきでしょうし、芸能活動に専念するのもいいでしょう

当然、受験勉強との両立も可能なはずで

すなわち、「詳論」の教科書が充実し、ネット上に無料の「詳論」の授業が多数あふれる環境のもと、「基礎概論」講座で入試選択科目の土台を築いておけば、職人修行等をしながら受験勉強もきちんとして、大学現役合格もできるのです

ちなみに、出席義務や評価は学校の企画部門や講座主催者の自由の問題でしょう

④ 演習ゼミと教員免許再考

高1の夏以降は、各高校で、数人から十数人程度の演習ゼミを設置し、これに参加するのが、有能な人材となる要諦でしょう

どんなゼミを設置できるか

ここが、各高校の真骨頂でしょう

各高校では、ゼミ設置の企画部門やコーディネーターが重要となってくるでしょう。有能な企画者・コーディネーターがいる学校ほど有能な人材が輩出され、志願者も増加し、優秀な生徒が集まるという好循環が生まれるというものでしょう（優秀な卒業生が有用な企画の提案をしたり、ゼミを主催するというもっとすごい好循環も生じ得るでしょう）

近い将来、高校は、中途半端な勉強や部活ではなく、優秀な人材輩出の基礎となる優良なゼミを実施する場となっていくことが必定なのではないでしょうか

例えば、院生による大学での勉強や研究の入門・準備ゼミ、大学受験過去問ゼミ、（元）医療関係者による医療ゼミ、大学や公共団体や企業の（元）研究員の方々による理系研究者への誘いゼミ、（元）企業の技術職の方々による技術職の夢・やりがい・貢献性を伝えるゼミ、（元）銀行員や（元）証券マンによる経済金融ゼミ、（元）

マスコミ関係者による報道ゼミ、(元)議員や(元)役所職員による地方行政ゼミ・・・等々、挙げれば、有用なゼミはきりが無いほど設置できるでしょう

「多様な選択講座」や「演習ゼミ」は、高校の枠を超えて参加できるようにするのが望ましいでしょう

上述の「多様な選択講座」にしても、「演習ゼミ」にしても、有能な人材育成という視点からすれば、現行教科はほとんど必須ではないのがおわかりでしょう
現代は、英数国理社以外にこそ、高校生を人材として育てる要素・材料がたくさんあると思います（英数国理社はとにかくコンパクトにするのが肝要なのがおわかりでしょう）

で、教員免許とは、なんなんでしょう

明治時代、小学校であれ、旧制中学であれ、英数国理社（音美家技体）のみを教えることを前提とし、まともに教えられる人はほとんどいない時代であり、教えられる人材を養成したのが、師範と高等師範で、戦後、それらが教育学部となった流れなんだろうが、今は、教えられる人間は掃いて捨てるほどいるわけで、さらには、高校生には、英数国理社以外に教えなければならないことがたくさんある時代ですから、教員免許というものは、古い時代の遺物であり、現代に必要なのか一考を要するでしょう（・・・私たちは、明治維新の拘束下で生きているんでしょうかね）

さらには、直接教えるか、企画部門担当かには関係なく、学校関係者（スタッフ）には、もっと様々な社会人経験のある多様な人材を集めるべきでしょう
大学出てすぐ教員なんて恐ろしい制度がまだ続いているなんて信じがたいものです（専任教員なら、10年ぐらいは最低、他の業界での社会人経験があって当然なのではないでしょうか）

⑤ 勉強コーチやチューター

以上のような方策で成功した先輩達が、コーチ（チューター）や講座企画提案者・選択講座講師・ゼミ主催者として各高校（何も出身高である必要はない）において、常駐指導すれば、還元環流の流れができあがるのです
まさに好循環の伝統がつくられていくのではないのでしょうか

⑥ 社会研修・地方研修

一個人の教員の効用のない授業に強制的に座らせておくのは無駄中の無駄だというのは、多くのみなさんが理解していることだと思います

吸収力や弾力に富んでいる若い時期こそ、外に出ましよう出ましよう

社会を見ましよう見せましよう

職業現場や地方の実情や辺境地域を見聞ましよう

例えば、後継者問題で悩んでいる、地方の伝統工芸や農林水産業に若者が集まれば、活性化し、その問題も解決されるかもしれませんし、先島諸島、小笠原諸島、硫黄島や道北・道東に若者が集まれば、辺境問題・領土問題も大きく変動前進するかもしれません

定住する若者も出てくるでしょう

ちなみに、職業現場研修や社会研修や地方研修の受け入れ費用（寮費や指導者費用）は、本人の労働の対価で十分まかなえ、多少の給与も支払えるのではないでしょう（詳細はここでの議論になじまないなので深入りしません）

また、地方に高校生が集まれば、地元の高校生との交流はもちろんのこと、小中学生に勉強やスポーツや芸術等の指導もでき、年長者が年下の面倒を見るという還元の良い循環が充実するでしょう

地方研修の結果、そのまま地方に就職し残れば、都市への集中から地方への分散化への流れができるかもしれません（東京等大都市への一極集中の解消と分散化の糸口になるでしょう）

若者を無償で地方へ送ることができれば、地方の活性化の契機はもちろんのこと、新しい需要・市場が起こり、新たな経済の流れができるはずですし、いろいろな観点・意味合いからも、高校生の社会研修は有意義・喫緊でしょう

そして、中高生や大学生の交通費完全無料が実現すれば、もっともっと世の中が変化します

遊び・観光・帰省・・・目的がなんであれ、中高生・大学生が全国を移動し見聞することが重要なのです

中高生や大学生の移動には、必ずや、日本経済や地域活性化への大きな見返りがあるのはもちろんのこと、認識力が増強され、人材輩出・三貢献や政治にも大きな好影響があるはずで

⑦ 学年廃止

同じ教室に、同じ年に生まれた人間だけを集めて、幼稚園から高校卒業まで授業を受けさせ、学校行事を経験させるのが、明治維新以来の制度です

多感で吸収力盛んな若い時期に、15年にもわたって、同じ年の人間同士しか交流させないという制度です

こういう体制が子供をだめをしているという意見が、最近、多くなってきているようです

数歳離れた子供たちを一集団とし、年長者は年下を常に慈しみ指導し、年少者は年長者の言動をよく見て、それを学び次の年少者を育てるということが肝要だということです（年長者が、年少者の言動に驚き刺激を受け成長していくというような面もあるでしょうし、その重要性は計り知れません）

古代以来江戸時代まではそうであったのに、明治以降の悪しき合理主義や戦後の忌まわしき平等主義で同年生まれ同学年という制度になっているのが現況なんでしょう

たまに、申し訳程度に、縦割りとかいう行事をやってもほとんど何の効果もないでしょう

日々日常、数歳離れた仲間と過ごさないと効果はないのではないのでしょうか
なんとか、学年を廃止する方策を考案しなければならないと考えている方も多いかと存じます

「とび級」を認めることは当然としても、もっと簡素に年齢や学年を意識しない制度を考案し即実施しなければならないでしょう

⑧ 自治体の頑張り

以上、考察してきたところから、御察しのとおり、各自治体や広域自治体連合が、地方地域の特徴をいかしたアイディアで特色ある優良な学校づくりや地方研修の受け入れ態勢を整えて、地域の繁栄をもたらすべきでしょう

これからは、いかにして、無料の全部もしくは一部寮制の、人材育成に定評があり、若者の興味を引く高校を造るかが地方の活性化の契機だと考えます
優良な高校の創設に成功すれば、優良な大学や大学院大学や研究機関や企業等の進

出と発展的に学園研究企業都市（「学研業都市」とでも略しましょうか）の創設に繋がるかもしれません

というのも、優秀な人材を多数輩出すれば、出世成功した者たちが、ゆかりの地に企業や研究機関や大学等を誘致したり、移転したり、創設したりで、繁栄の好循環をもたらすのです

もちろん、短期で成果を出そうとするのではなく、現在の10代の若者が、企業や役所の幹部になる3～40年後にようやく芽が出れば幸いと言う具合に、長いスパンで、国の再生や地域の発展を考えていかなければならないでしょう

まさに、「国家100年の計」ですね

3、家族修学旅行

ここで「家族修学旅行」について語るのは場違いでしょうが、この場を借りて、もう少々提案させていただきます

- 1、 テキスト・教科書を充実させて、自由化する
- 2、 土日祝日・早朝・授業時間・放課後等にこだわらず、地域の中学生・高校生・大学生・社会人・シニア等が地域の小・中・高生の勉強・スポーツ等を教える制度を創設する（地方に教える人材が不足している場合は、高校生や大学生が住込みで教えに行く態勢を整える）

国を挙げて以上のような制度をつくれば、塾・予備校等に注ぎ込む資金もほとんどなくなり、その資金をもってして、日本全国にある世界遺産を家族で見にいけるのではないのでしょうか（「家族修学旅行」と命名しておきます）

その際、年2回程度の「家族修学旅行」と認定されれば、閑散期平日の交通費は半額とか3割とかとし、宿泊施設も格安で提供されるようになれば、多くの家庭で「家族修学旅行」を実施できるのではないのでしょうか

旅行をすることにより、人が閑散期の平日に移動することによる経済的効果や旅行者の認識力の深化や絆の深まりが期待できるでしょう

4、跋文

以上の提案に関しては、「もうとっくに実践されている」、「不可能」、「無駄」、「危険」、「当然」、「まだ甘い」、「理想論」、「空論」、「馬鹿らしい」等の評価や意見があるでしょう

どれが正しいとか合理的だとかという問題ではなく、維新以来150年の制度を漫

然と全国で一律に続けるのではなく、議論は簡単に終わらせて、教育手段は原則自由であり、多種多様多数の方策を認めて、一人でも二人でも、1校でも2校でも解放して新しいことを自由に始めさせてみましょうよということです
要は、個々人の幸福と三貢献できる人材の育成と国家の安全・繁栄のそれぞれの最大値とバランスの問題なのです

制度は、国民（生徒）の幸福と国家の繁栄の手段として、両者の間にあるのであって、本来自由優先なのですから、世間に迷惑が掛からない範囲で、さっさと変えていきましょう

一笑するもよし、一蹴するもまた結構

ただ、現制度で人生がダメになるどころか命を落としている方々もたくさんいるということも事実、新しい方策で人生が救われる生徒のみなさんもいるということも事実です

視点

高校生世代の勉強期間を要約圧縮して時間をつくる
人材の育成という観点で教育を見直す